中日新聞（夕刊） 2011年（平成23年）5月27日（金曜日） ©中日新聞社 2011 （日刊）

中日新聞 夕刊
発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

紙つぶて

猿橋賞に思う

森 郁恵（もり いくえ）

明日二十八日は、猿橋賞の授賞式に出席する。女性科学者の地位向上に邁進（まいしん）された地球化学の故猿橋勝子博士の名前に由来する賞。気象研究所を定年退官された猿橋先生の資金で「女性科学者に明るい未来をの会」が設立され、毎年自然科学分野で顕著な業績を挙げた五十歳未満の女性科学者一名に授与される。

私も二〇〇六年、この賞の末席を汚す身となった。

第三十一回を迎える今年の受賞者は数学者の溝口紀子東京学芸大学准教授である。生物学者の私に数学者の受賞講演が理解できるか。心配すべきだろうが、実は溝口博士の講演に興味津々だ。

そう思う背景には現代生物学の状況があるように思う。複雑な生命現象を理解するため、従来はデカルト還元主義解析が主流であり、実際に多数の生物学的大発見がもたらされた。例えれば、ラジオを理解するために、最小単位の部品になるまでラジオを分解し、その分解過程からラジオのしくみを知る手法だ。

生命現象をありのまま、一つのシステムとして捉える。いまや生物学は、そんな本来あるべき姿が再発見されている。物理学、数学、化学、コンピューターサイエンスなど理学を結集して行う学問になってきた。いわゆる「システム生物学」の到来だ。

うちの研究室でも神経活動や記憶行動の数理モデリングを行い、神経の情報処理演算のしくみを探っている。だからこそ、数学者溝口博士の講演が待ち遠しいのである。

（名古屋大教授）

2011.5.27

2011.5.27 1面 №19